読書の価値 (3)

　さて、このような連想のきっかけになる刺激とは、どんなものだろうか。それはさまざまで、そもそも刺激だと感じない些細なものかもしれない。実際、そういったものに敏感か鈍感かで、連想が起動するか、そのまま見逃すかが決まっているようにも考えられる。

　日頃、人間はそんなに多くを経験するわけではない。自分の生活や仕事の範囲であれば、毎日はさほど変化はない。ときどき、旅行をすると刺激的なインプットがあるように感じるのは、それらが日常のものとは違っているから、いわば自分から遠く離れた情報だからである。距離的に遠く離れるという意味ではない。知識的、興味的に遠いということである。

　現代は、旅行にいかなくても、ＴＶやネットを通して、世界中の情報にアクセスできるので、日常から離れた刺激は、選り取りみどりである。ところが、たとえば、ＴＶであれば、毎日、毎週、同じ番組を見て、ぼんやりと時間を過ごすようになって、結局はそれが日常になってしまう。日常になれば、刺激は薄くなる。薄くなったと、おそらく自覚できるだろう。「ああ、なんか面白いことがないかな」と欠伸をしたくなる気持ちこそが、誰にでも備わっている人間の好奇心の発動といえるだろう。

　連想のきっかけとなる刺激は、日常から離れたインプットの量と質に依存している。そして、その種のインプットとして最も効率が良いのが、おそらく読書だ、と僕は考えているのだ。

　読書以外にももちろんある。僕の場合は、自然の観察や、手を使った工作なども、ほとんど同じくらい刺激がある。これは個人差があるだろう。電車に乗って、車窓の流れる風景を眺めているときも、いろいろ思いつくが、目で見ている数々のもの、街や村、看板、人々、構造物、地形なども刺激になるようだ。

　しかし、誰にでも共通して効果があるのは、やはり読書だと思う。それは、そこにあるものが、人間の個人の頭から出てきた言葉であり、その集合は、人間の英知の結晶だからである。本には、日常から距離を取る機能がある。本を開き、活字を読み始めるだけで、一瞬にして遠くまで行ける感覚がある。時間を遡ることも容易だし、自分以外の人物の視点でものを見ることもできる。経験したことのない感情も知ることができるし、人の思考の流れを辿ることだってできる。

（森博嗣『読書の価値』ＮＨＫ出版　による）

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 連想がより起きるようにするためにはどうすればよいか。本文の内容に合うように、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を本文中から七字で探し、書きぬきなさい。

□□□□□□□インプットを増やす。

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 旅行で刺激的なインプットがあるように感じられるのは、旅行で得られる情報が、自分の普段(ふだん)の知識や興味から遠いものだからである。

イ 現代ではネットで世界中の情報にアクセスできるので、どこに旅行したとしても刺激的な情報は得られなくなってしまっている。

ウ TVは自分の生活や仕事から離れた情報を得ることができるので、毎日、毎週TVにふれているうちに、自分の日常を変えてしまう力がある。

〔　　〕

(3) 「読書」について、筆者の考えに合うものを選びなさい。

ア 読書で得られる情報は人類の英知の一部であり、どんな人にとっても刺激が得やすい。

イ 本には日常から距離を取る機能があり、日常的に読書をするのは誤った習慣である。

ウ 誰にでもその人に合う本があり、自分と同じ視点でものごとを捉(とら)えた本が読書の効果が高い。

〔　　〕